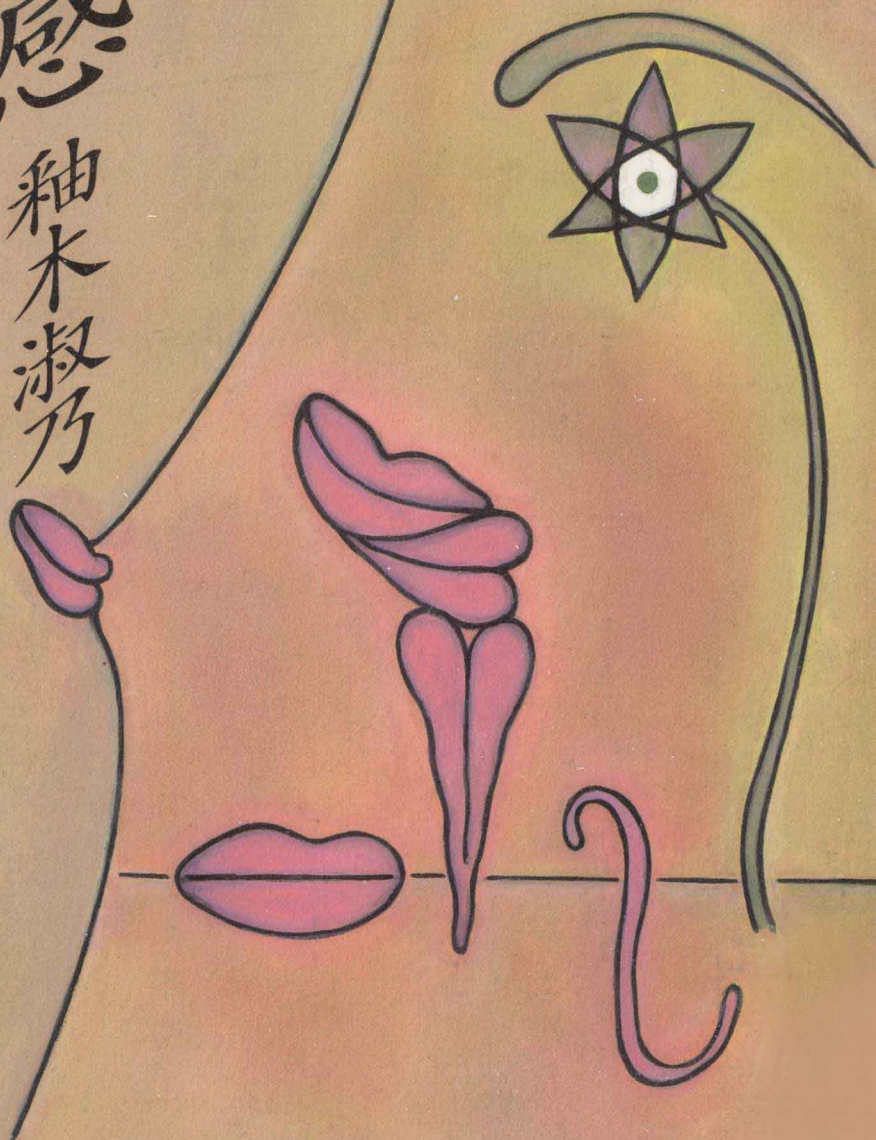


予感

糸木淑乃



丁感

由木淑乃

江苏工业学院图书馆
藏书章

釉木淑乃 一九五五年十月三日埼玉県生。青山学院高等部卒業後、ミール・ロシア語研究所でロシア語を学ぶ。科学技術翻訳会社で露文タイピストとして働く傍ら、ツアーの添乗にも従事する。

装画 まえの・まり 装釘 前野洋一

初出誌 すばる 1991年12月号

予
感

一九九二年一月一〇日 第一刷発行

著者 釉木淑乃

発行者 若菜 正

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二・五―一〇
郵便番号 一〇一―一五〇

編集部 (〇三) 三三三〇―六一〇〇
電話 販売部 (〇三) 三三三〇―六三九三

製作課 (〇三) 三三三〇―六〇八〇
印刷所 大日本印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写、複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

©1992 Y. Yuuki

Printed in Japan ISBN4-08-772830-7 C0093

予 感

「この頃の子ってみんなスタイルいいと思わない？　とくべつ醜いって子見かけないし、美人じゃなくても顔は小さかったりするじゃない？　やっぱし食料と生活様式のせいかしら？　体型までどんどん白人ぽくなってゐるものね……」

阿妻あづまは不機嫌そうにタバコの煙りを鼻から吹き出した。

「三十過ぎたらやっぱしデブにいいのかしら？　白人みたいに」

銅製のやかんが沸騰している。輪子は耐熱ガラスの紅茶ポットに無造作に熱湯を注ぎ、大型冷蔵庫からワッフルを取り出した。

「乳製品とハンバーガーとラマーズ法で出来た子供達が大人になったサンプルってまだないのよ。ここ十年かそのらのことでしょう？」

「体型や体質の違いは民族によって染色体も違うからなんだって。いくら肉食が主流になったからって、ドラム缶みたいなお腹にはならないわよ」

輪子はカッターナイフの刃先のような声音で言う、わざと音をたててマイセンのティーカップを食器棚から取り出した。

真昼の陽射しがフラッシュのように眩ゆく裏庭に降るのが、ガラス窓を透かして見える。

午前十一時四十分。

正午の時報を境にして、太陽の輝き具合も、午前と午後とに明確に分たれるようだ。

裏庭の叢が照り返す陽射しは、気のせいか朝の冷気を溶かしきれず、日向のカタバミの葉が、日陰のカタバミの分まで光線を求めて、タンポポを覆い隠すように茎を伸ばしている。台所には電気が灯り、裏庭に面した窓辺だけを陽射しが掠めていた。

棚になる奥行きのある窓台の四隅に、うつすら埃が溜まっている。輪子は手を休めて窓辺をみつめる。アロエの鉢植え、輪ゴムが留めてある薄汚れた陶製の小壺が置かれた、北向きの窓台。普段は保護色のように周囲の色に埋没している埃や蜘蛛の糸が、今この瞬間、烈しくもなく弱過ぎることもない淡い外光の中に、くつきりと浮かび上がり、見るべき被写体が何かを、教えている。微妙な視覚の変化で、あたりまえのように映っていた日常がズレ、それまで見えなかったものが、隠し絵のようにそこかしこに現れる。輪子は壁の時計を見上げた。八重さんが買い物に出かけて、ゆうに一時間は過ぎていた。

「エアロビだのジャズダンスだのの教室があるじゃない？ 凄いいんだってね。

みんな素っぱだかでシャワー浴びて出てくるんだって」

輪子はティーカップに紅茶を注ぎながら、棘のある声で話し続ける阿妻を盗み見た。

「シャワー浴びる時はあたしだって素っぱだかになるわよ」

黙々とサヤエンドウのスジを取っている花梨が、きつい声で答えた。

「そうじゃなくて、隣の奥さん、テニススクールに通い始めたんだって。着替える場所やシャワーが他の教室と共同でさ、普通シャワー浴びたら何か着て外に出るでしょう？　ところがスッポンポンのまま出てくる若い子に出くわして目のやり場に困ったって。レオタード着てるとマヒして平気になるんだって。昔はさ、アメリカでダンス習ってる子が、壁にむかって恥ずかしそうに着替えているのは日本人だけで、アメリカ人はスパッと威勢良く脱ぐって感心してたのよ。アメリカナイズされた生活はうら若い女の子のかわいらしい羞恥心をどんどん奪ってる。どうせいつかは消えるもんよ。妊娠すりゃ嫌でも産婦人科の門

叩くのよ。男の前で股開くのなんて何でもなくなるんだからさ、恥ずかしがれる時にきちんと恥ずかしがつかないともったいないと思うわけよ」

「あたしは今だって恥ずかしいわよ。絶対カーテン閉めてもらうもん」

「あたしが言いたいのはね……」

阿妻は輪子を睨みつけてから続けた。

「足のきれいな二十一歳の女の子でも、十三年経てば三十四になるんだってこと」

阿妻の夫は二十一歳の女の子と浮気した。花梨は阿妻が口にした『デブ』に気を悪くしている。阿妻は花梨の機嫌を取るように、優しい口調でつけ加えた。

「幸いなことに、二十一過ぎたら十三年なんてあっという間……」

「イラン系の人って太らないんだって。ロジェの従兄弟がイラン人の女の人と結婚したんだって。ダンナはグルメで食べるわ食べさすわ、でも、全然太んないんだって。だから最近はお奥さんのことみんなでシャモのマーギーって呼んで

るんだって……」

花梨は立ち上がり、流しでサヤエンドウを洗う。

「昔飼ってたニワトリ。ヒステリーでまずかつたんだって」

台所には、長時間煮込んだクリームシチューの香りが満ちている。

シチューにするなりポトフにするなり、仕上げは輪子たちに任せると、昨夜のうちに八重さんが氣を使って牛のバラ肉と根菜類を煮込んでおいたのを、一番早くこの家に着いた輪子が勝手にハウスクリームシチューの素を入れてしまい、さんざん花梨に叱られた。花梨は昔からころろ太っていたが、最近はい児の母としての貫禄が、とくに上腕部についている。高校の頃は地理と土木が得意で、『暮しの手帖』の読者欄に投稿してはその謝礼金を貰うのが趣味だった。

花梨と阿妻は、八重さんが買い物に出かけたのと入れ違いにこの家に着いた。三人が持ち寄った料理と八重さんの分を皿に盛って居間のテーブルに並べると、

突然花梨がオートミールクッキーを作りたいと言出した。

乾物類を入れた収納棚が、窓台に接して置いてある。小麦粉やかんぴようやパン粉が土台石のようにぎっしり詰まっている収納棚にはオートミールは見つからず、代わりにゼラチンの薄っぺらい袋が見えた。花梨はオートミールクッキーからグレープフルーツシャーベットに変更すると、棚の底からゼラチンの袋の端を引っ張った。するとゼラチンの袋と一緒にキャスター付きの収納棚全体が動いた。お陰でそれまで棚の背に隠れていた窓台の縁が忽然と現れた。縁に沿って、一直線に埃が積もっていた。花梨はすぐに埃を台布巾で拭いたのだが、拭くために収納棚を扇状に壁から離すと、窓台の下は、凝固した油の滴を付着させたまま黒光りしていた。（棚を離れた時に起きた小さなつむじ風で、壁にくっついた糸状の埃が一斉にそよいだ）。結局花梨はシャーベット作りを止め、ついでに棚を元の位置に戻すことさえ止めて、頭を出したまま引っぱ込みがつかなくなったゼラチンの袋を無理やり引き抜くと、日高コンブの上に

そつと重ねた。

輪子としては、結婚前の亭主を知っている女たちといるのは氣詰まりだろうと、何を買に行くのかを尋ねないまま、ゆっくりしてらっしゃいと八重さんに声をかけたのだが、本当にゆっくりしている八重さんが、憎たらしくなってきた。八重さんがすべき準備は大方済んでいたし、彼女がいらない方が輪子たちにしても氣は楽なのだが、今日の顔ぶれから見ても家を空けて許されるのは、せいぜい三十分が限度だろう。

八重さんは、輪子にとって年下の義姉にあたる。

彼女の夫の咲^{めい}と輪子は、男女の双子で、輪子にとって実家にあたるこの家に、今は咲と八重さんの二人が住んでいる。

咲の結婚当初、古い木造家屋の骨格に新建材を嵌め込み、真新しい壁紙や塗料で新婚に相応しい内装に変えたこの家には、モツの煮込みにパテックスを混ぜたような、奇妙な匂いが漂っていた。

すでに結婚していた輪子は、口出しはすまいと自分に言い聞かせてはいたものの、とくに改築の間中、自分の拠り所が根こそぎ剥がされていくような痛みを覚えていた。暎と輪子は幼い頃に両親を失い、父方の祖父母の元で育てられた。馴染み深い匂いがそこに染みついた家具、壁紙、絨毯。生まれた時から、いや、生まれる前からこの家で営まれていた生活の音、匂い、木材の繊維の中にまで一緒に編み込まれたような、懐かしい死者たちの思い出……双子の揺籠とも言うべきこの家が、赤の他人の登場によって、再生をよぎなくされたのである。

梅雨が明けるか明けないかのある日、祖母のべっこうの櫛を探しに来た時、風呂場のバスタオルから、子供の頃の暎の体臭が微かに香った。はつきりとそう記憶していたわけではない。懐かしい香りの源を漠然と探るうちに、ひょいと、もしかしたらと思いつき、思いついた途端幸せな気分になった。その頃しきりと暎と八重さんのセックスシーンが浮かんできて困った。『ベッドの中の

暎の裸体』という近親相姦的な想像に絡む罪悪感が、振じれに振じれて、逆に『子供の頃の裸ん坊の暎』へと一気に弾けたのだらうと、後になって輪子は思った。こうして精神は、常にバランスを保っている。

輪子がタオルを犬のように嗅いでいるところに八重さんが現れ、好きではない貫いものの香水を入れて洗濯をしてみると、揮発系の鋭さが消えて、ほんのりと心地好く香るようになったと笑った。思いがけずに森林浴を体験したみたい……。改めて嗅いでみると、なるほどコケのような匂いがする。続けて八重さんは、母の匂いを思い出すと、呟いた。

母とコケ……どこか深い所で繋がっている気がする。大地の香り、瑞々しい緑の床、樹齢何百年かの大木が憩う森林の静けさ、奥深い森……間違いなく母胎の暗喩だ。洒落た小瓶の中の化学薬品が、洗濯機の中で攪拌され不純物が取り除かれ、最後に残ったのが奥深い緑の香りとは！ 暎も輪子も母の匂いとは縁が薄い。八重さんが見つけたのは、不要の香水の賢い利用法ではない。シニ

カルな暎の仮面の下、乳飲み子の心を包む、香りの心遣いを発見したのだ。輪子は感心した。その時から、輪子は八重さんを身内として受け入れる努力をすることに決めた。現在のこの家は、結婚当初の入歯のような浮いた新しさにも落ち着きが現れ、古典になったキュビズムのような風格さえ感じられる。

「汚れるわよ」

収納棚と窓台の間に出来た扇形の隙間に立っている阿妻が、窓の棧の埃を掬ってみてから花梨を振り返る。花梨は首を反転させて輪子に視線を移し、何か言いかけて止め、おとなしくシチューの味見に取りかかる。次に阿妻と輪子が一瞬視線を合わせ、阿妻は再びゆつくりと、裏庭の方へ顔を戻す。三人ともがその時、同時に、同じ事を思っていた。

輪子が高校一年の時、祖父母が相次いで亡くなり、それからまもなく知り合

った浜ちゃんという十歳年上の男性と、輪子は高校から大学にかけて、足かけ五年近く同棲していた。

母親代わりを自認していた叔母もまた遅咲きの恋愛事件に忙しく、この時期、輪子の周辺のそこかしこが春風のように香ばしく、ざわめいていた。中でもこの家を占領した暎は、熟練した彫刻家の手で、練られ、塗り込められ、やがて削ぎ落とされるように、顔立ち、肌、体格が、明瞭な輪郭を描いて際立っていくのに伴い、輪子の耳に入る噂の内容も、聞く度にヴァージョンアップする。今でもよく話題になるエピソードに、高二の時の学園祭に、暎が銀座のバーのホステスを呼んだというのがある。輪子の友達・マユミの弟・薫が、暎と同じ男子校の中学に通っていたことから、この姉弟を加えた情報ネットワークがその頃出来あがっていた。この一件を耳にした時、輪子は生まれて初めて、暎を見知らぬ他人のように感じたものだ。たまたまこの家に戻ってみると、輪子は必ず誰か、叔母のではない女性の痕跡を感じる。そして大学時代の約二年間、暎